特集 多文化シンポジウム

「外国人の立場から考える地震災害」

東日本大震災から約1年の今年3月3日(土)、「多文化シンポジウム」が開催されました。

基調講演では、(公財)福島県国際交流協会・渡辺専務理事から、災害の状況や外国人市民支援の様子、国内国外からの応援に感謝するメッセージが静かに語られました。パネルディスカッション「大震災と外国人の暮らし」では、パネラーが震災後の思いや生活の状況、支援活動内容を話し、災害時に限らず、皆がつながりを持って生活をする重要性を再認識する機会になりました。

コーディネーター
吉田聖子(よしだせいこ)さん C
東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターフェロー

パネラー
ホジェリオ・アンドラジさん H
ブラジル出身
協会ボランティア／バルーンアーティスト

パネラー
招 杏明(しょうきょうめい)さん S
中国出身
中国料理店主

パネラー
エドモンド・ダンカンさん E
オーストラリア出身
語学講師

パネラー
小倉(おぐら)ノエミさん O
フィリピン出身
外国語相談員

※アンドラジ氏は、当日インフルエンザのため、外国語相談員が代行

C 震災が起きた時の様子とその後の活動についてお聞かせ下さい。

H 仕事から戻って寝ていました。日本語がうまくないため、近所の人に話しかけられず不安でした。原発事故の不安から帰国した知人も多くいましたが、大変な時こそ日本で一緒に頑張りたいと思いました。被災地のがれきの中でオモチャを見つけて衝撃を受け、自分はバルーンアートやピエロを通じて皆に元気を与えたいと思いました。

S 中国料理教室の準備をしていました。息子から、とどろきアリーナが避難所になっていると聞いて炊き出しに行き、4月にいわき市、6月に宮城県内の4ヶ所に行きました。今は「被災地食事支援プログラム」としてお粥を届けたり、被災地では皆が集まるコミュニティ・交流の場所作りを心掛けています。

E 仕事で英語を教えていました。母国の家族からすぐ帰国するよう再三連絡があり、いろいろ悩みましたが帰国しませんでした。被災地の子どもたちがハッピーになれることは何かと考え、被災地ではバーベキューや遊びを通じて子どもたちと交流しました。

O 仕事中でした。フィリピン・ルソン島での大地震(1990年)の経験から、すぐに津波が来ると感じました。4月に、福島在住のフィリピン人が立ち上げた支援プロジェクト「HAWAK KAMAY FUKUSHIMA(ハワク カマイ フクシマ)」に繋がる募金活動や被災地訪問を行いました。被災者の方々との交流を通じて、「多文化共生」の本当の意味が分かった気がしました。職場では、神奈川県内で出産したいという妊娠8ヶ月の女性(被災地在住)に対する支援を行い、相談員の役割や重要性を実感し、自分は同胞に何ができるか改めて考える機会になりました。

C 川崎の人たちができることは何だと思いますか?

H「助けたい」より「何かやりたい」という気持ちや、一緒に何かをやっていく心のつながりを持つことです。

S(心の)手をつないで進んでいくこと。(被災者の方々への)心の応援が大事だと思います。

E 自分のできる範囲で何かすること。募金だけではなく、皆何かできると思います。

O 他人への思いやりや関心を持ち、外国人と関わろうとしてほしいです。

C 皆さんのお話を聞いて、私たちは「川崎人」として世界への発信のきっかけ作りをしていくことが大切だと思いました。そして、ここにいる私たちは、お互いを見守る温かい心を持っていたいと強く願います。

基調講演

福島からのメッセージ
日本中、世界中からの応援に感謝して、
外国人県民とともに
福島が一つになって復興に向け前進します。

東日本大震災と福島県国際交流協会の外国人支援

(公財)福島県国際交流協会 渡辺(わたなべ) 幸吉(こうきち) 専務理事

東日本大震災に際して寄せられた日本中、世界中からのご支援に心から感謝しています。川崎市からは消防本部の緊急消防援助隊が福島第一原発3号機への放水を行ったほか、医療支援隊や給水隊が活躍してくれました。

【今の福島の姿を知ってほしい】

平成24年1月1日時点での県内での避難者数は約95,000人、県外への避難者数は約62,000人。県外避難や帰国した外国人は2割を超えたが、大半は福島に戻りました。警戒区域と計画的避難区域以外では平常通りの生活ができています。

福島県の11,000人の外国人の特徴は、家族単位で点在しており、日頃から日本人とふれあい、外国人も「福島人」になっていることです。

【国際交流協会としての活動は】

外国語地震情報センターのHPで5ヶ国語の情報を発信(英・中・韓・タ・ポ)／母国や県外への避難、放射線関係、避難所、行政手続きの翻訳などの相談／外国人の現状やニーズの把握、多言語災害シートの掲示

外国人支援を行っている民間交流団体への助成／放射線被曝や食料、水への影響などのセミナー開催 等を行っています。

【震災から見えてきた課題として】

◉被災した時の事務所機能の確保
◉外国語情報の多様な伝達手段の開発(携帯でも見られる情報発信、フェイスブックを利用した安否確認など。多様な担い手の発掘と育成(キーマンの発掘、外国人コミュニティーの育成、多様な連絡網)

「がんばろう福島」ブログ発信中 最新号はこちらから http://www.worldvillage.org/

参加された方々の声

◉日本人も海外へ逃げ出していた中で、日本に残る選択をし、被災地でボランティアをされていることに非常に感動しました。
◉外国の方々の地球人ぶり、フットワークの軽さ、他人のことは自分のこと、という優しさ
◉外国人、日本人を問わず、人と人とのつながりの大切さを痛感
◉小さな子どもや老人、障害者をかかえた方への支援の方法や緊急時のネットワーク作りは大切
◉日本に住んでいる外国人との交流で考え方がよく理解でき、最高に良い企画でした。
◉まずは、身近な人同士互いに助け合っていける社会にもっとしていきたい。

今後に向けて

3月3日は川崎市国際交流協会主催による「ボランティア研修会」と「災害時の外国人支援に関する講演、パネルディスカッションを含めたシンポジウム」が行われ、大変内容の濃い充実した一日になりました。

これらの中で取り上げられたことは、日常から行政機関(国際交流協会を含む)と各地のコミュニティーのネットワーク作りを進める／ボランティアの育成を進める／他の地域で起きた事を学び自分の地域では何が起きるかを想定し備える ことでした。キーワードは「常日頃からの備え」です。

協会登録ボランティアのためのボランティア研修会 当日開催

災害における外国人市民のニーズとボランティアの通訳・翻訳活動

講師 多文化共生センター東京
田中(たなか) 阿貴(あき) さん

川崎市国際交流協会に登録しているボランティアのために、毎年、開催されているボランティア研修会ですが、今年は、全国の被災地で支援活動をして来られた田中阿貴さんを講師に迎えて、約100名のボランティアが参加しました。

講演では、災害発生、避難生活、生活再建、日常生活へのソフトランディング、と云う状況変化の中で「実際に必要とされるサポートとは何か」、「どのような情報を提供するか」などについてのお話がありました。実例としての阪神淡路大震災、中越地震および東日本大震災の状況のお話は具体的で実感として理解することができました。

講演に続いて、支援活動に役立つ「英語」または「やさしい日本語」での通訳ワークショップもあり、充実した研修となりました。

(取材・文:編集ボランティア 小島俊彦 相沢明子)